

近代中国の洋画家関紫蘭の女性像の研究 : 日中の師との関わりを中心に

武, 梦茹

<https://hdl.handle.net/2324/7182264>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏名	武夢茹			
論文名	近代中国の洋画家関紫蘭の女性像の研究—日中の師との関わりを中心に			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	石井 祐子
	副査	九州大学	教授	井手 誠之輔
	副査	九州大学	教授	楊 昱
	副査	九州大学	名誉教授	後小路 雅弘

論文審査の結果の要旨

上記論文は、1920年代後半から1930年代に活躍した近代中国の洋画家、関紫蘭（1903～1985）の描く女性像について、以下の3つの観点から考察することを目的としている。すなわち、1）これまで中国近代洋画史研究で看過されてきた1920年代から30年代にかけて上海で活動した「第2世代」としての当該画家の活動に光を当て、「第1世代」との連続性のなかで検討すること、2）美術学校への留学とは異なる日中画家の交流の意義について考察すること、3）作品の分析を主軸に据え、文字資料によって構築した時代的コンテクストと作品の造形表現を共に検討し、その相互関係を考察することを目指すものである。

1970年代末の中国政府による改革開放政策を契機として、中国、日本、アメリカの美術史研究者によって近代中国洋画史研究が本格的に始まり、1990年代からは欧米を発端とするニュー・アート・ヒストリーの影響もあり、ジェンダー論、視覚文化論、制度論の観点に立脚した研究も増えている。ただし、この分野を専門とする研究は国際的にみても未だ十分ではなく、加えて、近代中国の洋画作品は、戦乱や政治的要因のため多くが失われており現存作が極めて少ない。よって、これまでの近代中国洋画史の通史書では、画家の言説分析が先行する傾向があり、現存する作品に対しても実証的な研究が十分に行われてこなかった。

このような状況の中で本論文は、先行研究の蓄積を踏まえつつ、一次資料を丹念に渉猟し、作品の画面を徹底的に観察・分析しようという態度に貫かれている。そのうえで、関紫蘭が上海で最も精力的に制作活動を行った1920年代後半から1930年にかけて制作した3点の女性像、すなわち《少女像》（1929年）、《少女》（1930年）、《マンドリンを弾く女》（1930年）を中心に据え、各章でそれぞれの作品の制作背景と制作過程、制作意図を明らかにしている。これらの分析を通じて、従来フォーヴィスムやマティス受容として理解されてきた関紫蘭の作品の様式が、近代初期の中国の美術教育史、あるいは美術教育システムのなかで、陳抱一、丁衍庸、中川紀元という日中の「第1世代」との関わりを通じて形成されただけでなく、上海の写真館文化と深く結びついていたことが論証されている。とくに第二章、第三章において、作品の直接的参照源となったイメージを新たに特定するのみならず、単なる「模倣」や「写し」にとどまらない制作上の意義を関紫蘭の画業の展開とともに一貫した議論として提示した点は意欲的で、今後の関紫蘭研究の新たな礎を築くものと考えられる。

一方で、本論文には残された課題もある。たとえば、本研究を中国近代洋画史研究のより広い文脈に位置づけるためには、関紫蘭以外の「第2世代」の画家たち、同時代の「女性画家」たちとの比較など、さらなる横の広がりを見据える必要がある。あるいは、写真館文化以外の同時代

の上海の視覚文化や、中国の画論や新南画との関係など、より巨視的な文脈のなかに関紫蘭の画業を位置づけることも期待される。ただし、それらを措いてなお、現存する作例の少ない画家を扱う困難を、着実な調査と史資料の渉猟によって真摯に乗り越えた本研究の学術的意義は大きく、今後の中国近代美術史研究の進展に大いに貢献すると考えられる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）を授与されるのに十分な能力を持つことを認めるものである。